

---

# 大江土八百八町浪漫譚

甲子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大江土八百八町浪漫譚

### 【Nコード】

N8384Z

### 【作者名】

甲子

### 【あらすじ】

江戸時代。

征夷大將軍に任じられた徳川家康が江戸に幕府を開いた時より始まった天下泰平の時代。

それが現実における史実。

江戸時代。

征夷大將軍に任じられた徳河家康が江戸に幕府を開いた時より始まった天下泰平の時代。

それは現実には無い架空歴史。

これは、史実にある江戸時代によく似た、しかし幾つもの違いがある江戸時代を舞台にした物語である。

江戸時代の中心都市、江戸。

その江戸の街に住まう傘張り浪人が一人の少女と奇縁を結んだ時、  
大江土八百八町を縦横に騒がせる”剣乱武闘”の活劇が、いざ幕  
を開ける。

## 其ノ一（前書き）

本作品は史実である江戸時代をモチーフにして作られた架空の時代である江戸時代を舞台としたファンタジーです。

そのため時代考証、衣装考証等をはじめとする各種設定について、必ずしも史実にある江戸時代のものとは一致していないことがあります。

予め御承知おき下さいますようお願い致します。

## 其ノ一

江戸時代。

征夷大將軍に任じられた徳川家康が江戸に幕府を開いた時より始まった、天下泰平の時代。

それが現実における史実。

江戸時代。

征夷大將軍に任じられた徳河家康が江戸に幕府を開いた時より始まった、天下泰平の時代。

それは現実には無い架空歴史。

これは、史実にある江戸時代によく似た、しかし幾つもの違いがある江戸時代を舞台にした物語である。

江戸時代の中心都市、江戸。

その江戸の街に住まう傘張り浪人が一人の少女と奇縁を結んだ時。大江土八百八町を縦横に騒がせる”剣乱武闘”の活劇が、いざ幕を開ける。

\*\*\*\*\*

江戸の街はその中心に江戸幕府の本拠たる江戸城を戴き、その周囲に幕府に連なる大名たちの屋敷が広がり、更にその周囲に町人達が住まう下町が拡大していくという同心円を描いた一大都市である。大都市と呼ばれる所以は百万人を超えるともいわれるその人口の多さにあった。

一方でそんな人口の多さとは対照的に、都市の規模としてはむしろ小さい。

江戸という元は沼地という立地のため、人口増加に土地開発が追

いつかなかったことが主たる要因とも言われているが本当のところは定かではない。

ともかく、江戸の街は有数の人口を抱える街でありながら、その人口を十分に抱けるだけの広さを持つていなかった。

結果、人口の半数を占める町人達の多くは長屋と呼ばれる平屋建ての建物の狭い家での生活が普通となる。

そして、そんな江戸の街の外縁部に密集する長屋、その一つにこれから物語の中心となる浪人の居があった。

\*\*\*\*\*

その長屋のがたつく引き戸を開けたならば、まず目の前には土間がある。

視線を横に向ければ土間の隅には薪竈が据えられている、二人並んで立てば肩が触れ合うほどのこじんまりとした台所。

再び視線を正面に戻すと、土間の奥には畳の敷かれた部屋が一つきりだけ広がっている。

広がっている、とは言えそれは決して広いものではない。

より正確に言うならば、狭い。

ほんの4畳半だ。

そして、大まかな長屋の構造は、たったこれだけである。

さらに詳細に見ていくと、そのみすばらしさに拍車がかかっていく。

例えば入り口の引き戸。

木で組まれたそれは、長年の酷使によるものか風雨に晒された影響か、所々が朽ちかけている。

先に開けた時にがたついたのも、そのせいだ。

例えば畳。

果たしていつ敷かれたものか、表面部分に当たる畳表は茶色に変色した上にささくれ立つという見るも無残なもの。

指先ほどの穴が開いていたりするが、それでも最低限の手入れはなされているらしく、カビが生えている様子がないことだけが救いかもしれない。

他にも挙げていけば切りがなく、この長屋が人の住まう場所として上等なものではないことは間違いないかった。

だが、これは決して珍しい住まいではない。

むしろ江戸に住まう町人の大半が暮らす長屋の中では平均的な部類に入るのだ。

だからこの長屋の一室に居を構える彼も、ここでの暮らしに納得していた。

\*\*\*\*\*

畳敷きの部屋の真ん中に、胡坐をかいて背中をやや丸めるようにしている青年が一人。

いもこよ・かずの  
名を居元代和乃。

年の頃は20に届くか否かといったところ。

髪型は月代を剃らず鬘を結わず、艶のある黒髪をまとめて後ろに流して一つにまとめた所謂総髪。

顔立ちは比較的整ったもので、今は何事かに集中しているらしく引き締められている。

着物はやや赤茶けた小袖と地味な装い。

人の溢れ返る大通りに紛れ込んでしまったら即座に見出せるかどうか難しい程度で、珍しい姿ではない。

ただ一つ、その身に纏う雰囲気だけが少し違う。

為りこそ質素ではあるが粗野でもなければ草臥れたようなみずばらしさもない。

血氣盛んな年頃から考えれば、むしろ枯れたような落ち着きがある。

こうして畳の上で胡坐をかいている姿が、どこか様になっていた。

和乃が昼の日中から部屋で胡坐をかいているのは、決して自堕落な生活を送っているためではない。

むしろ今まさに仕事の真っ最中だった。

即ち胡坐をかいた和乃の手元に目をやれば、それは一目瞭然。

一本の長く太めの竹の棒を中心として周囲に放射状に広がる細い竹の棒。

和傘である。

和傘とは番傘や蛇の目傘などの種類を総称する、軸と骨を竹や木、傘布を油を塗り防水加工した紙で作られる傘のこと。

そして和乃は、組まれた竹製の骨組みに糊で紙を貼り付ける作業に取り掛かっているところだった。

とは言え専門の傘張り職人というわけではない。

そもそも和傘はその材料の性質上、耐久性に難があり特に傘布にあたる油紙の張替えは必須であり、まさにその張替えが和乃の仕事だった。

つまるところ補修作業の内職である。

しかし、だからといって軽視してよい仕事でもない。

張り替えられた傘は元の傘よりも劣る品として町人でも購入できるようにな値段で扱われるが、かと言って決して安い品というわけでもないのである。

一例を挙げると、一人一食あたり500円程度の物価水準において張替えられた傘の価格が5000円程。

耐久性に難があり修理や買い換えなければならぬことを考えれば、そう無碍に扱っていい品ではないことが分かるだろう。



実際、和乃はこの傘張りから得る収入だけで裕福とは言えないものの食うに困らない生活を送れているのだ。

今、和乃の手元では骨組みに刷毛で糊が塗られている途中であり、その左脇には既に紙の張られた傘が糊を乾かすために広げて置かれ、更にその隣には乾かし終わったらしい傘が畳まれている。

反対側にあたる右脇、壁のすぐ傍にはこれから張替えを待つ骨組だけの傘が数本寝かされていた。

そんな中、奇妙な物がある。

寝かされた骨組だけの傘とは別に、一張の傘が混ざっているだ。

その傘は既に傘布の紙が張られているにもかかわらず何故か骨組みだけの傘と同じ側に置かれている奇妙さに加えて、一つだけ見た目に明らかな違いがある。

それは他の傘が竹製であるのに対して、その傘だけは木目調が軸の部分に浮かんでいる点だ。

よく見れば軸よりも細い骨の部分にも木目のようなものが浮かんでいるのが紙を透かして見える。

しかし、一張だけより分けられているのはその材質の違いによるものか、はたまたそれ以外の理由か定かではない。

ちょうど和乃が手元での作業を終えたらしく次の傘へと手を伸ばす。

狭い部屋ゆえ立ち上がるまでも無く、寝かされている骨組みだけの傘へと手が届き　かけたその時。

手が触れる直前で向かう先が変わったかと思えば、和乃は片膝をついた姿勢で木目調の傘を手にしていた。

直後、すばーん、と景気のいい音を立てて引き戸が開け放たれる。

「よう和乃、儲かってるか！」

開口一番、飛び込んできたのは挨拶を兼ねた言葉。

闊達そのものと言うほかない声に続いて、声の主が土間へと上がり込む。

勿論部屋の主たる和乃の了承など得もせずに、だ。

「今日も今日とてせつせと傘張りか？ 最近ジメジメしてつから座りっぱなしだと尻に根が生えちまうから気をつけな」

「そういうお前は相変わらず頭に花を咲かせているな。既に手遅れだから気をつけても仕方ないのが残念だ」

対する和乃は木目調の傘を元通り戻して立ち上がり、土間へ上がりこんできた人物と相對していた。

「おいおいおいおい、久しぶりに顔出してみればいきなりそれかよ」

「……つい昨日も来たばかりだろう」

「一日も経ちやあ久しぶりだったの。で、どんな按配だい」

「ちようど乾かし終わったところのも含めて四張あるから持っていけ、燈次とんじ」

そう言うつと和乃は部屋の隅から取り上げた紙の張り替えられた傘を、燈次と呼んだ青年に手渡した。

燈次はいわば仲買商人である。

どこかで買ってきた骨組みだけの傘を和乃へ売り、和乃が紙を張り替えた傘を買い取ってどこかへ売ることと利鞘を得る商いをしてるものだ。

もちろん和乃個人で骨組みの傘を買い取り、直した傘を売ることができれば燈次に利鞘を持っていかれずに済む。

しかし、それをするには信用できる取引相手を一から自分で見つけなくてはならないため、かなりの困難を伴う。

その困難を顔の広い燈次が受け持つ代わりに利益の一部を渡していると考えれば、和乃にとっても損のある話ではないのである。

そして燈次は今の短い遣り取りからも明らかなように、竹を割ったような性格の人物だ。

齒に衣を着せない物言いも、嘘がつけない表れの一つとも言えるだろう。

見た目も闊達そのもの、結った鬚も実に様になっている。

そんな性格だからか人に好まれ易い燈次は驚くほどに顔が広く、和乃が聞いた噂が真実ならば下町どころか武家屋敷の広がる辺りにまで知り合いがいるとのことだった。

「あいよ、毎度。次もよろしく頼まあ」

傘の代金を和乃に支払い、燈次は懷から取り出した風呂敷で手早く傘をまとめていく。

そして、風呂敷を背負って踵を返しかけたところで、『そうそう』と思い出したように付け加えた。

「聞いたかい、”鼠小僧”がまた出たって話をよ」

「ああ、小耳に挟んだ」

「今度狙われたのはどっかの商人屋敷だったらしいな。例によってあくどい商いをしてたつたあ専らの噂だ」

”鼠小僧”。

最近、江戸の街を騒がせている盗人を、町人達がそう呼んでいる。本来盗人となれば敵視されて当然の悪人であるが、ある特徴から町人達の間では頗る評判がいいという変わり種だ。

その特徴は、盗みにはいる先が常に後ろ暗い商いや人に言えぬような行いを繰り返している札付きの人物の屋敷であるということ。

江戸幕府が裁かぬ悪党を狙った義賊、それが町人達の間での”鼠小僧”に対する認識だった。

「で、どう思う？」

「何をだ？」

「だから”鼠小僧”だよ”鼠小僧”。和乃はそいつらのことをどう思うか、って聞いてんだ」

「そうだな……」

あくどい商いをしているということは即ち、商いを通じて相手から不当に金を吸い上げている盗人と見ることもできる。

そう考えれば”鼠小僧”がしていることは盗人相手に盗みを働いている、ということになるだろう。

しかし、一般的に考えれば盗みは罪であり、盗みに入る相手が誰であろうと罪であることに代わりはない、とも言える。

「悪徳商人を懲らしめる点には否定のしようがないが、その方法が盗みである点は肯定しがたい、といったところかな」

「ほほう。それならどうやって悪徳商人を懲らしめるってんだい？」

興味深いといった様子で食いついた燈次の疑問に、和乃はしばし考えた末。

「あくどい商いをしている確たる証拠を衆目に晒す、とかだろうか。盗みに頼らず、真つ当な手段でな」

「なるほどなるほど。つつてもそんなこたあ簡単にできる話じゃないだろ？」

「……それをいわれると耳が痛い。たしかに容易ではないし、むしろ相当に困難な話だろう」

「だよなあ……」

「まあ、これは『私ならこうする』という一案に過ぎない。”鼠小僧”は”鼠小僧”なりに考えた末の方法が盗みというなら、盗むという行為こそ悪ではあるが”鼠小僧”自身が性根まで悪ではない、

ということなのだろうな」

\*\*\*\*\*

”鼠小僧”の話題の後、二三の世間話を交わしどこか満足げな燈次は、現れた時を巻き戻すかのように忽然と去って行った。

仲買という商いをしている以上、江戸のあちこちを廻る生業であるから、自然とその行動が迅速なものになるのだろう。

あの脚なら、和乃との会話が期せずして長くなってしまったための遅れも程なく取り戻すのは間違いない。

燈次が去っていくのを見送った和乃は、引き戸を閉めて再び傘張りの仕事に戻る。

割と手先の器用な和乃ではあるが、一方でどこか凝り性な部分があるため、仕事一つとっても妥協がし難い。

結果として和乃の仕事は丁寧と評判ではあるが作業速度としては早くはないといったところに落ち着くため、次に燈次がやってくるまでにどんどんと作業を進める必要があった。

顔の広い燈次とは対照的に、和乃の交友関係は狭い。

かなりの頻度で顔を出す燈次を除けば、和乃の元を訪れる人物は数えるほどしかないと言ってもいい。

そのため日に複数人がやってくることなど滅多になかった。

だから今日は、珍しい日と言えるだろう。

「御免下さいーい」

呼びかけられる声に、和乃は仕事の手を止めもしなければ顔を上げることもしなかった。

長屋は壁が薄いことや家が連なっているという構造上、隣近所の声は基本的に筒抜けのものになる。

それゆえ和乃は最初、呼びかけが自分の家に向けられているものだと思えなかったのだ。

ましてやそれが聞き覚えのない声ならば、尚更である。

繰り返す呼びかけられてようやく和乃は自分が対象となっていることを自覚して顔を上げ、しかし仕事を中断させられたことで少しばかり険のある声で応じた。

「一体どちら様がどんなご用件だね？」

「私、今日から隣に住まわせて頂く事になった者です。つきましてはその御挨拶に伺わせて頂きました」

「なるほど。いやそれは失礼をした」

相手の丁寧すぎるほどの物言いのせいか僅かばかり驚いた様子を見せつつ、和乃は立ち上がる。

そのついでにといったように木目調の傘を取り、引き戸の横に立て掛けた後、引き戸を開け放つ。

果たしてそこにいたのは年の頃15、6に見える一人の少女。

身長差ゆえに見下ろすことになった和乃の目に最初に飛び込んでくるのは長く伸びた艶のある美しい黒髪。

続いて凛とした瞳、形のよい小鼻、瑞々しい唇と非の打ち所のない整った顔。かんはせ

小柄で細身に見えるも、背筋の通った姿勢の良さがそれらを打ち消して余りある。

端的に言つて、数年も経てば美女と持て囃されるだろうことが想像に難くない少女だった。

その少女が、す、と頭を下げることで、ようやく和乃は我に返り、少女に見蕩れていた己を自覚する。

「初めまして、芳と申します。どうやら御多忙のところ、お邪魔致しました」

「こちらこそお待たせして申し訳ない。和乃と言う」

挨拶を交わし、不思議な沈黙が二人の間に流れる。

それと言うのも何故か芳と名乗った少女が既に挨拶は終えただろうに一向に立ち去ろうとする気配がないからだ。

一体どうしたことかと首をかしげる和乃だったが、さりとて見詰め合っているのもばつが悪いことこの上ない。

仕方なしに和乃は己から気になっていることをぶつけて見ることにした。

「あー……お芳さん、と呼んでもいいかね？」

「え　あ、はい！」

「……？　ではお芳さん。隣に越してきたとのことだったが、ご家族はどちらに？」

一瞬返事に戸惑った様子を見せたかと思いきや、お芳はどこか嬉しそうに首肯した。

そんな様子も和乃には気にかかるどころだったが、ひとまず先に気になっていることを口にする。

お芳の正確な年齢は分からないものの、少女にしか見えない女性一人で長屋住まいということのを和乃は聞いたことがない。

だから当然保護者に当たる人物、親兄弟なりと一緒に越してきたのだと考えたのだが。

「私一人です」

あっさりと、和乃の考えを消し飛ばしてしまう一言だった。

しかも唐突にお芳の口調が固くなったのを感じた和乃は、慌てて頭を下げる。

「申し訳ない。初対面にもかかわらず立ち入ったことを聞いてしまったようだ」

「あ、いえ、謝って頂くほどの事では。私の方こそ説明不足でしたから、ここはお相子ということで」

「そうかね？ まあそう言うのなら……では、お詫びと言うわけではないが何かあれば力になろう。娘一人での長屋暮らしともなれば何かと不自由もあるやもしれんし、男手が必要になったら声をかけてくれて構わない」

「まあ。お優しい言葉、ありがとうございます」

お芳は胸の前で両手を合わせて嬉しそうに微笑み、和乃も釣られて頬が緩む。

その後は互いに打ち解けられたように会話が弾んでしまい、気がつけば引越しの挨拶にしては結構な時間が過ぎていた。

そして、用事の刻限が迫っていることに気づいたお芳は少しばかり残念そうな表情で会話の終わりを切り出す。

「それではこれで失礼しますね。改めて今日からどうぞよろしくお願いします、和乃さん」

「ああ。こちらこそよろしく、お芳さん」

ぺこり、と小さく頭を下げてから去っていくお芳を見送って。

部屋に戻り引き戸を閉めて。

和乃は初めて、自分がいつに無く緊張していたことに今更気づいていた。

緊張の原因がお芳との会話にあることは明々白々。

しかし、いかに人付き合いの希薄な和乃とて、女性との会話にこれだけ緊張したのは和乃の覚えている限り初めてのことだった。

その一方で、矛盾するようだが、男女問わず初対面の相手にもの数分で会話が弾むほどに打ち解けたこともまた、初めてのことに。



今では丁々発止とやりあう燈次相手ですら、初めの数回は事務的な会話しか交わさなかったというのに。

隣に越してきた少女、芳。

何とも不思議な気分になりつつ和乃は仕事に戻り、しかし細心の注意を払いながら傘に紙を張るその時も、心の片隅にお芳の姿が映り込んでいた。

## 其ノ二

和乃かずのの朝は早い。

太陽が地平線に顔を出す頃には薄っぺらい布団から抜け出し、畳んだ布団を部屋の隅へ片す。

朝の空気に身を震わせつつ向かった先の井戸、そこから汲み上げた冷水で顔を洗って眠気を吹き飛ばす。

さつと身繕いを終えれば竈に火を熾し、朝食作り。

朝食は所謂一汁一菜、炊いた雑穀米に味噌汁、野菜の煮付けに漬物と質素なものだ。

男ながら慣れた手つきで用意を終えれば誰憚ることなく、ささやかな至福を堪能。

食事を終えれば後は片付け、ここでもまた井戸の世話になる。

独り身ゆえの気楽さでとんとん拍子に起床から朝食の片付けが終わると、その後は仕事に取り掛かるだけ。

仕事とはもちろん、傘張りだ。

道具を揃えて部屋の真ん中辺りに胡坐をかいて作業開始。

それが普段通りの和乃の朝だったが、今日は事情があり少々異なる流れとなるのだった。

\*\*\*\*\*

先程和乃の朝が早い、と言ったが正確には、江戸の街に住まう者達の朝は速い。

太陽が昇り始める頃には既に街中の道という道に人が溢れ出す。

それは商人だったり職人だったり様々だが、誰も彼もが自分の生活を賭けて縦横無尽に動き回っている。

結果、どう言うことになるかというと。

「相変わらず人が多い……」

店が軒を連ねる江土の大通りのうちの一つ、その片隅に追いやられるようにして立つ和乃は、うんざりした様子で弱音を吐いていた。視界には右へ左へ行き交う人々、それらを跳ね飛ばしかなない勢いで荷車が爆走しているかと思えば、それすら避けて駆ける馬。混雑ぶりでは現代における朝の通勤時間帯の駅構内を想像してもえれば分かり易い。

ただ一つ、駅構内ではある程度人の流れが定まっているのに対して、ここ江土の街の人の流れは無秩序状態。

あちらこちらで人がぶつかる蹴飛ばされるといった事態が頻繁に巻き起こっている。

活気溢れると言えば聞こえはいいが、実のところは殺気立っていると言えなくもない。

もちろん、騒ぎを起せば相応の咎となることは分かっているから、自ら望んで騒がせようと思っている者もそうそういないだろうが。

ともあれそんな江土の朝の大通りを、和乃は酷く苦手になっていた。

そもそも和乃が苦手をおしてまで朝の江土に繰り出した理由は、今朝の食事作りまで遡る。

いざ米を炊かん、と無駄に意気込んで米櫃を蓋を開け放った直後、和乃は凍りつく。

一度目を閉じて深呼吸。

再び目を開け、勢い良く米びつを覗き込んで、一言。

「ない、だと……!？」

米びつの中に、米が無い。

否、全く無いわけではなかったのが唯一の救い。

むしろ量ったように今朝の朝食分相当の米だけが米櫃の中に残っていたのはどうしたものなのか。

愕然としつつも気を取り直し、要は問題の先送りにし、朝食作りを再開。

食事を終え、片付けを終え、さて仕事だと腰を下ろす段になって、ようやく現状を理解したのだ。

すなわち 米を買いに行かねばならない、と。

時を戻して、現在。

長屋から路地を抜けて辿りついたる大通り。

目指す米屋は遙か先、というわけでもない。

和乃の脚ならばものの十数分とかならない距離に過ぎないから、近場にあると言える。

ただし、この溢れ返る人の波が無ければ、だ。

今の和乃には大通りを行く人が氾濫する河にも時化た海にも見えてしまう。

そんな場所に人が放り出されたらどうなるか、試すまでも無い。

ならば諦めるか、ということそうもいかなない理由がある。

一つ、午前のうちに買わなければ昼食から主食が消えてしまうこと。

二つ、和乃が竊屑にしている米屋はなかなか繁盛しているため、目当ての安い米が売り切れる可能性があること。

前者は我慢しようもあるが、質素な生活を送る身としては後者を看過することはできない。

そもそも目指す米屋を和乃が竊屑にしているのは、安いながらも比較的上手い米を売っているからなのだ。

諦められないと和乃は気合を入れ直し、いつの間にか俯かせてい

た顔を決然と上げ、しかし視界に飛び込んでくる光景に早くも心が折れかけ

「あれ。和乃おにーさん、こんなところで立ち止まって一体どうしたの？」

背後から掛けられた声に誘われて、和乃は振り返る。

そして、視線をぐぐつと下げてようやく相手の顔を視界に収めた。年の頃12、3の幼さを感じさせる少女。

背丈も低く、おかっぱ頭の天辺が和乃の胸にも届かない程度ながら、小さな体から滲み出んばかりのはつらつとした雰囲気をもっている。

和乃のさして多くない交友関係の中で、この特徴に一致する人物は一人だけ。

月に数回、燈次とうじに引き連れられるようにして顔を出す居酒屋兼飯処”糧家”かていえの看板娘のうちの最年少、冬ふゆという名の少女だった。

「こんなところで会うとは珍しい。お冬ちゃんこそ朝から買い物かね」

「うん、そーなの。お店の今日の仕込みで足りなくなっちゃったお米とお野菜を買いに行く途中なの」

「それはまた奇遇な。私もちょうど米屋に 行こうと思っていたのだが、生憎この人出でな。二の足を踏んでいたところだ」

「それなら一緒に行くの！」

「あ、いや、待つ」

和乃の制止も空しく、お冬は和乃の手を取り大通りへ颯爽とした足取りで飛び込んで行く。

さすがに年端もいかない少女の手を振り払うことは躊躇われ、手を引かれるままに和乃も後に続いた。

途端、前後左右に迫る人の群れ。

和乃は別に人嫌いというわけではない。

ただ、見知らぬ相手との不用意な接触に対して緊張を抱いてしまう性質たちなため、こういった混雑した場所を苦手としているのである。勢い良くぶつかれば、争いになるかもしれない。

口論程度で済めばまだしも、喧嘩沙汰になるかもしれない。そう考えるだけで、和乃は身が竦む思いに囚われてしまう。

だからお冬に手を引かれて進みながら、和乃の内心はかなりの緊張を強いられていた。

しかし、程なくしてふと気がつく。

人の波を掻き分けるように進んでいると思いきや、和乃は誰かとぶつかることはおるか、肩を掠めるほどの接触すらせずに歩んでいることに。

そしてその理由が、己の手を引くお冬にあることに。

小さくない驚きの眼差しで、和乃は目の前で僅かに揺れているお冬の後頭部を見つめる。

背後からではその表情を伺うことはできないが、鼻歌めいたものが聞こえてくる辺り、上機嫌らしい。

それでいて歩む足に一切の淀みが無いのだ。

全く迷うこと無く人と人との隙間を縫うようにすり抜けて行くという妙技に、和乃は声も無い。

ただただ手を引かれるままに後が続くだけだった。

\*\*\*\*\*

「いや本当に助かった。ありがとう、お冬ちゃん」

「こちらこそ助かったの。お米運んでくれて、ありがとうございま

した」

担いでいた野菜を置いた和乃に、ぺこりとお冬は可愛らしいお辞儀を一つ。

ここは大通りから少し外れたところを流れる水路沿いの道、そこに面した”糧家”の軒先。

あの後無事に米屋に辿り着いた和乃は先導してくれたお冬へのお礼に、野菜の購入に付き合うと共にその運搬を買って出たのだ。

ちなみにお冬が購入した米はかなりの量だったために米屋の人足によって運んでもらう手筈になっている。

また、帰り道でもお冬の巧みな先導は健在だったため、野菜に加えて自分の米を担いだ和乃だったがほとんど苦も無く”糧家”まで辿り着けた。

和乃にしてみれば米屋でお冬と別れてしまっていたらこうも易々と帰路にはつけていなかっただろうから、お礼と言いつつ見事にお冬に同行したと言えなくも無い。

もっとも、和乃がお冬に感謝していることにこれっぽっちの嘘が無いのも事実であった。

「お帰りなさい、冬ちゃん。早かったわねえ」

お冬の声聞きつけたのだろう、労いの言葉と共に勝手口から一人の女性が現れた。

それは、腰に届くほどの黒髪を一つに束ねて肩口から前に垂らした妙齡の人物。

につこり、という擬音が聞こえてきそうなほど穏やかな笑みを湛えた様子で、お冬を包み込むように抱き締める。

結果、女性の豊かな胸にすっぽりとお冬の顔は覆われてしまう。

「むぎゅっ」

「良い子良い子」

「ふは。子供扱いしないでほしいの」

「あらあら冬ちゃんったら」

頭を撫でるために女性の手が緩んだのを見計らって、お冬は圧迫される顔の脱出に成功する。

続いて背中に回された腕からするりと抜け出すと、女性は残念そうに唇を尖らせていた。

外見は立派な大人でありながら、童のような仕草が妙に似合っている。

「お姉ちゃんにとって妹はいつまでも可愛い子供みたいなものなのよ？ 年下なんだから。ねえ、和ちゃんもそう思うでしょう？」

「そうですね」

唐突に話を振られた”和ちゃん”こと和乃だが、ある程度この問い掛けを予想していたから迷うこと無く頷き返す。

「……二人とも嫌いなもの！」

この場の年長者二人に子供認定されてしまったお冬は憤懣やるかたないといった様子で勝手口の中へと飛び込んで行ってしまう。

そんな様子さえも可愛らしく、お冬が子供扱いを免れるのはまだまだ先になりそうだった。

店の中に姿を消したお冬を見送り、残された二人は笑みを交わす。

「嫌われちゃったわねえ」

「嫌われてしまいましたか」

「でも冬ちゃんの良い子だから、きつとすぐに許してくれるわ

ところで和ちゃん、お姉ちゃんに何か言うことがあるんじゃないか



しら？」

「……ご無沙汰しています、お春<sup>はる</sup>さん」

お春は今までの遣り取りからも分かるようにお冬の姉で、「ここ”糧家”を切り盛りする看板娘三姉妹の長女だ。

包容力ある大人の理想像のような女性で、和乃もあれこれと世話になってる。

例えば今朝食卓の上った野菜の煮付けはお春が作った物をお裾分けと言って頂いた物であったり、解れた着物の裾を繕ってもらったりと枚挙に暇が無い。

「ええ、本当にご無沙汰さま。最後にお店に来てくれたのは何時の事だったかしら」

「それはその」

「やっと来てくれたと思ったら燈次さんに引っ張ってこられてばかりだし」

「……う」

「たまには自分から、自分の足で来てくれたりしたらお姉ちゃん嬉しいんだけどなあ」

「……………ぜ、善処します」

お春の言葉ばかりか雰囲気にもぐいぐいと圧倒され、和乃は身を小さく縮ませながら首肯する。

このように、和乃は全く頭が上がらない。

”和ちゃん”などと呼ばれていること、それに唯々諾々と従っていることからそれは明らかだろう。

さらにお春はその穏やかな雰囲気とは裏腹に、威圧感めいたものがあるのだ。

何と言つか、直接責められているわけではないのにどうにも罪悪感を感じてしまって仕方が無い、とでもいうような。

「善処だけ？」

「……………近いうちに必ず顔を出します」

「はい、よく出来ました」

今もまた、押し切られるままに約束を結ばされた感がある。

しかも表面的にはお春から要求されていないのに、和乃の方が何かに耐えかねたように言わされたような。

「うふふ」

満面の笑み、と形容できる表情で和乃に身を寄せると、その頭をお春は優しく撫でる。

さすがに恥ずかしいことこの上ない扱いであることに加えて、知り合いとはいえ人との接触が苦手な和乃は二重の意味で体を緊張させた。

そうであるにもかかわらず抵抗しないのは、抵抗すればするほどお春の行動が大胆なものになっていくと知っているからである。

「こら姉さん！　いつまで油売ってるのよ！」

されるがままだった和乃に差し伸べられた救いの手。

それは、勝手口から新たに現れた少女がお春の頭を背後から叩いた手だった。

「お姉ちゃんを叩くなんてひどい。夏ちゃん乱暴っ」

「仕込みの最中だつていうのに抜け出して帰って来ない姉さんが悪いのよ、まったく……」

頭を押さえたお春に向かい、両手を腰に当てて仁王立ちする少女

は夏<sup>なつ</sup>。

”糧家”で評判の看板娘の最後の一人にして、三姉妹の次女。外見はその勝気な言葉使いの反さず、短めの髪に意志の強そうな瞳、引き締まった口元と、顔の部分部分にどことなく男性的な要素が感じられる。

しかし勿論彼女は女性。

間違つて男扱いなどしようものなら、その細い腕から繰り出される鉄拳が頭頂部に突き刺さること請け合いだ。

ある時実際に”糧家”で泥酔した客が悪戯に抱きつき、その直後に起こった光景は当時店内にいた他の客達の間で戦慄と共に語り継がれていたりする。

そんな少女だから、このまま放っておいたら店の前で姉に説教を始めかねない。

さすがに衆目に晒すのは忍びなく、二人の間へと和乃は割って入った。

「すまないお夏、私のせいなのだ。ついお春さんと話し込んでしまつてな」

「え、和乃っ!？」

お夏の立ち位置からだど、お春がいたために和乃はちょうど死角に入っていた。

この時になつて初めて和乃がいることに気づいた様子で、お夏は目を丸くして驚きをあらわにする。

堂に入った姿で自分の姉に苦言を呈していたのを忘れたかのように、視線が左右に振れたり髪の毛の先を弄つたりと落ち着きを失っていた。

二呼吸ほどの間ばかり拳動不審な動きを見せたお夏は、唐突に深呼吸を一つ。

そして、一体何事かで見守っていた和乃にぴしりと指を突きつけた。

「なんであんたがいるのよっ!？」

「先程偶然会ったお冬ちゃんに助けられてな。そのお礼を兼ねてここまで荷を」

「ああそうありがとう用がないなら今すぐ回れ右して」

「……相変わらず理不尽な。せめて最後まで聞くくらいしてくれても良いだろうに」

早口言葉のような口調のお夏によって話を途中で遮られ、和乃は惘然とした表情で眉を顰める。

「何よ、文句でもあるわけ？」

「文句ではない。ただ、そういうせっかちな所を直したほうが良いとは言わせてもらいたい」

「むっ」

和乃とお夏、両者の視線が互いの中間で衝突する。

急速に機嫌が悪くなっていることを示すように、お夏の目つきが鋭くなっていく。

一触即発といった険悪な雰囲気俄かに漂い出したまさにその時、機先を制するかのように二人の横合いから両手を合わせたような音が割り込んだ。

そして、どこか緩んだ声色のお春の声が続く。

「和ちゃん、最後に”糧家”<sup>りやうけ</sup>に来てくれたのは何時だったかしら」

それは、この場の雰囲気は一切無視した質問。

一体どんな意図が、と疑問に感じつつも和乃は脳裏からお春の質

問に対する答えを呼び起こそうとして、

「たしか」

「最後に来たのは二十日前よ」

問われた本人よりも先に、お夏が答えていた。

僅かな驚きを浮かべた表情の和乃が目を向けると、お夏はどこか苛立たしげに腕を組んだ格好で見返してくる。

「……何よ」

「いや、よく覚えていると思ってな」

「なっ」

どこか感心したように和乃が言うなり、お夏は態度を一変させた。それまでの不機嫌や苛立ちといった負の感情が表情から一気に消し飛び、代わりに浮かんできたのは混乱や動揺。

頬を赤くし口元を引き結んだお夏は、和乃から視線を逸らしていた。

そんな妹の様子に、姉はくすくすと忍び笑いを漏らす。

「夏ちゃん、偶々覚えてたのよね」

「そ、そうよっ！ た、偶々、偶然っ！」

「うんうん、まさか毎日『今日も来なかった』なんて日記に書いて

「

「わああああっ　　！？」

言葉を遮るように大声を張り上げたばかりか、お夏はお春の口を塞ぐべく抱きつくようにして飛び掛った。

何故か嬉しそうに身を擦るお春を、お夏は必至の形相で離さない。さらにそこへ、今の大声を聞きつけたらしいお冬が勝手口から顔

を覗かせる。

「夏姉様、どうしたの？」

「冬！？ うッ、ううん、なんでもないのよ？」

「春姉様？」

「聞いて聞いて、冬ちゃん。夏ちゃんが」

「ああッ、もう！ 姉さんは戻って冬の手伝いをしててっ！」

拘束からするりと抜け出してお冬に何事か囁こうとしているお春に、ついにお夏は決断した。

即ち、隔離。

事態についていけず目を白黒させているお冬と、どこか悪戯めいた笑みを浮かべるお春を、まとめて勝手口から店の中へと押し込む。さらに力任せに勝手口を閉じ、その戸を背にしてお夏はようやく一息つくことができた。

「はぁ……」

肺腑に溜まった空気をまとめて吐き出すような、深い深いため息だった。

「……何やら苦勞しているようだな」

「ええもうホントに勘弁してほしいわよ……」

三姉妹の騒ぎを呆氣にとられて見守っていた和乃の言葉は多分に同情が込められていた。

普段ならばその言葉に反発していただろうお夏も、今ばかりは疲れた様子で同意したのだった。

しばらくして。

落ち着きを取り戻したお夏は、小さな声で感謝を口にしていた。

「ありがとね」

「うん？」

「だから。冬の代わりに野菜とか運んでくれたんでしょ。助かったから、ありがとう」

和乃に視線を合わせず、そつぽをむいたお夏は感謝を伝える態度に相応しいとはいいがたい。

しかし和乃は、それがうべだけの言葉だからだと誤解することはない。はなかった。

これがお夏なりの精一杯なだと、正しく理解する。

だから、特に気を悪くしたりするようなこともなく受け取った。

「気にするな。むしろ私の方が日頃から世話になっている身だ」

「まあ、そうだね」

「……そこは嘘でもいいから否定してほしかったな」

「ホントのことなんだから仕方ないじゃない」

和乃が情けなさそうに顔をしかめ、それを見たお夏は楽しそうに笑う。

「ああ、やっと笑顔になったな」

「……え？」

「いや。今日顔を合わせた時から既に機嫌を悪くしていたようだったから、気になっていたのだ」

だから笑顔を見られて安心した、と和乃が言葉を続けた途端。ぼんっ、と音が聞こえてきそうな勢いでお夏の顔が真っ赤に染まった。

俄かに熱を帯びた己の両頬にお夏は両手を当てて冷まそうとするも、焼け石に水。

そもそも顔ばかりか全身の体温が急上昇していたため、冷やすための手すら熱を帯びてしまっていたのである。

進退窮まったお夏は、慌てて顔を伏せた。

「……どうした？」

和乃の目には、突然顔を伏せたお夏が具合を悪くしたようにも見えてしまう。

だからだろう、心配が声にも表れ、言葉こそいつもどおりだが相手を気遣う柔らかな口調になっていた。

その声を耳にしたお夏は、顔を伏せたまま身を震わせる。

これはいよいよ只事ではない可能性がある、と案じた和乃がお夏に一步身を寄せた瞬間。

「っ」

発条仕掛けの絡繰じみた前触れのない動きで、お夏は伏せていた顔を起こした。

それまでよりも一歩だけ詰まった距離ゆえ、和乃はお夏から見上げられる格好になる。

自然、二人は見つめ合うことになり、そして。

「和乃さん？」

第三者の声を聞きつけたお夏が、弾かれたように飛び退った。

この時間帯こそ人通りがやや疎らではあるものの、ここは歴とした江戸の往来である。

通りがかかる人がいない筈もない。



しかし、この狭くも広い江戸の街。

先日知り合ったばかりの二人が全くの偶然で遭遇するというのは珍しい部類に入るだろう。

「やっぱり和乃さんでした」

「ああ、お芳<sup>よし</sup>さんか。どこかへお出掛けかね」

「はい。今は用事を済ませまして帰り道、です」

そう言つて、お芳は手にしていた風呂敷包みを軽く持ち上げて見せる。

中に何が入っているか和乃には分からなかったが、今の仕草からしてこの包みがお芳の言うところの用事に関わるものだったらしい。

「……ねえ、ちょっと」

不意に背後から袖を引かれ、和乃は振り返る。

「……誰？」

果たしてそこには、一人蚊帳の外に置かれることになってしまったお夏の姿。

お夏は和乃の陰に隠れるようにしつつ、お芳のことをまるで胡乱なもののように見つめていた。

「すまない。彼女は先日知り合った方でお芳さんという。お芳さん、こちらは私が世話になつているお夏だ」

「芳、と申します。初めまして」

「あ、と、初めまして。夏です」

両方と知り合いである和乃が仲介して互いを紹介すると、お芳は

穏やかに、お夏はどこか戸惑いつつ挨拶を交わしあう。

直後、和乃は腕がもげんばかりの勢いでお夏に引き摺られた。

そうやってお芳から距離を取り、お夏は和乃に噛み付くような勢いで額を合わせる。

「ちよつとどついうことよ。出不精のあんたがどこで知り合つたつて言つの」

「出不精……」

「事実でしょ。ほら、そんなことはいいからさつさと答えなさい」

お夏に急かされるまま、和乃はお芳が長屋の隣に越してきたことを伝える。

途端にお夏の機嫌が再び急降下していくのが、顔を寄せている和乃には嫌と言うほどに分かった。

「……へー、そう。そうなんだ。”糧家”<sup>うち</sup>に中々来ないと思ったら隣に越してきた綺麗な娘さんと仲良くしてたつて訳ね」

「仲良く？ 挨拶を交わして世間話をしたくらいなんだが」

「……………誤魔化した」

「いや、誤魔化してなど」

「ふんっ」

「っ！」

最早聞く耳持たないという意思表示の表れだろう、威勢良く息を吐いたお夏は顔ばかりか全身でそっぽを向いていた。

ついでに和乃の足を踏んでいる。

予期せぬ痛みに和乃が蹲って悶えるのを流し見て、お夏は身を翻した。

「それじゃ私、仕事の続きがありますのでこれで失礼しますね！」

棘のある口調で宣言するなり、”糧家”の勝手口に飛び込んで行く。

ぴしゃり、と音を立てて閉じられた戸が、それ以上の関わりを拒んでいることを伝えてきていた。

「え、ええと……大丈夫ですか、和乃さん？」

「ああ、すまない。大丈夫だ」

手を差し伸べてくるお芳に断りを入れて、和乃はどうにか立ち上がる。

未だ踏まれた足は痛みが残っていたが、女性に助け起こされるのもばつが悪い。

それに疎らではあるが人通りもある。

近所で評判の”糧家”の前で言い争っていた上に女性に助けられた等と風聞に上ってしまうのは、和乃でなくとも勘弁したいことだった。

「どうやら虫の居所が悪かったらしい。お芳さんにはすまないことをしてしまったな」

「いいえ、気になさらないで下さい。後日折りを見て、改めて挨拶に伺ってみますから」

「そう言ってもらえると助かる。さて……お詫び、というわけではないが長屋まで送ろう」

「よろしいのですか？」

「なに、ちょうど私も帰るところだな。……そうなるとこれではお詫びにならないか」

「いいえ、そんなことはありませんよ。どうぞよろしくお願いします」

上品さを感じさせる笑みを浮かべるお芳に、和乃は足の痛みをおして歩き出す。

勿論、自分が購入した米を担ぐことは忘れない。

痛みと米の重さ、その両方が和乃の歩みを普段よりも遅いものにしていたが、そのおかげで帰りの道すがらお芳との世間話に花が咲いたのは僥倖だったかもしれない。

ちなみに。

傍から見れば仲睦まじく並んで歩いていく和乃とお芳の二人を、”糧家”の中から齒噛みしつつ見送った人物がいたり。

その人物を背後から笑いを堪えて見ている別の人物がいたり。

二人の姉の分までせつせと働く妹がいたり。

そんなことを和乃は全く、これっぽっちも気づいていないのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8384z/>

---

大江土八百八町浪漫譚

2011年12月28日22時46分発行